

1 陸軍々医学舎長緒方惟準講述の

「陸軍医務沿革史」

中山 沃

川崎医療福祉大学

緒方惟準（一八四三—一九〇九）は明治十九年五月、本職の近衛軍医長と兼務の東京陸軍病院長を免ぜられ、陸軍軍医学舎長兼近衛軍医長に補せられた。ついで明治二〇年二月一日、病気を理由に依願退官し、現役を退いた。しかし辞職の真意は、同僚との脚気問題についての意見が合わなかったためであった。この軍医舎長時代に惟準が軍医舎に在学の軍医らに講義し筆録されたと考えられる「陸軍医務沿革史」と題する草稿本（惟準の自筆か？）と考えられる一冊（和装本、縦二三・三×横一六・二センチ）を、最近演者は入手した。この講義録については今まで全く報告されていない。「陸軍軍医学校史」には、「小池正直、谷口謙ハ軍陣衛

生学ヲ、永松東海ハ菌学及顕微鏡学ヲ、足立寛ハ軍陣外科学ヲ、尚小池教官ハ内科診断学ヲ、伊部彝ハ検眼法ヲ、曾根二郎ハ分析学ヲ各講述シ、陸軍医務沿革史は舎長緒方惟準之ヲ担任ス」と記載されているが、その内容には全く触れていない。惟準の訳書、著述などの目録にも今まで全く記されていないものであるので、報告する。

表紙には「陸軍醫務沿革史」と墨書されている。目次はなく、本文四十三丁で、一ページ十七行の野紙（雁皮紙）に一行おきに毛筆で記されている。第十三丁の欄外に八月九日、第十九丁に八月廿三日、第三一丁に八月三十日と書かれているので、明治十九年の夏八月に講述したものである。

本文第一丁の冒頭に、「陸軍医務沿革史 学舎長緒方惟準講述」と記されている。清書本でなく、ほとんどのページで訂正、加筆されている。惟準自筆の講義の草稿か、あるいは惟準の講義を聴講者が記録したものが、今の段階では判別できないが、惟準の自筆本の文字と比較してみると、かなり類似している。本文の冒

頭に、「陸軍医務」の語句を、仏、英、独、蘭語で記し、陸軍衛生事務の義であると述べている。次に、自分(惟準)が二八年前(安政六年、一八五九)長崎に遊学、ボンベからオランダの軍医制度の話聞き、オランダには官制に、総監、医監、医正のあることを知った。そして明治維新の戦乱時に各藩の医師たちは何の規則もなしに、ただ負傷兵を治療するのみであった。維新後惟準はさらに英医ウイリスから戦時衛生事務のことを伝聞した。

明治二年二月、新政府は大阪にボードインを招き、病院における一般治療のかたわら、軍事病院で医官に軍隊医務について講義をさせた。つづいて徴兵(撰兵)医務、軍陣衛生学などの講義もさせた。次いでボードインの後任ブツケマがこの任務を引き継ぎ、講義を行った。一方東京では、松本順は文部省のお雇い医師ホフマンを雇い、在京の医官に理学的診断法を講義させた。このような明治維新直後から明治十九年(一八八六)までの軍隊医務・軍医の養成制度の変遷について十一丁にわたって概説されている。これまで知られて

いない事実もあり、貴重な資料といえることができる。

つぎにヨーロッパの戦時衛生事務などを講じている。これはリヒテル氏の軍陣外科書からの抜粋引用である。リヒテル氏とは、プロシヤ帝国の多彩な経歴を持つ陸軍軍医 Adolf Leopold Richter (一七九八—一八七六) のことで、プロシヤの軍陣医療制度の確立に寄与した人物で、多くの外科、整形外科などの著書がある。

プロシヤの戦時衛生事務、戦時衛生員(軍医・看護兵など)養成の沿革史を詳細に講述、さらに欧州における主要な戦争(ドイツの独立戦争、クリミア戦争など)におけるプロシヤ・フランス・英国・ロシアなどの各国軍医らの活動について講述している(十二—四三丁)。将来日本でも遭遇するかも知れない戦争に備えて、これら各国の事例を参考にし、日本陸軍々医部でも着々制度をととのえて行き、日清戦争時にはその成果をいかに発揮したと考えられる。